子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2002年7月　NO.108

「弧」　丹下　登

〈もくじ〉

病気による苦悩……瀬戸山元一　2
絵金の脇役たち……中西　進　3
IT社会の新しいコミュニティについて①……川村晶子　4～5
文化について　その二……西澤邦輔　6～7
あじさいによせて……柳井　卓　8～9
詩のボクシング観戦記……小松弘愛　10～11
「スポーツ芸術」って何だ？－国体と地域の文化－……12
わがまち魚の棚……西村和子　13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

病気による苦悩

瀬戸山　元一

私たちは人生を通じて、疾患に罹る、癒えるということを繰り返し、病人になることで、悩み苦しむことしかできなかった。だから、病気とはつきあいたくない、拒否したいなどと望み、病気を忌み嫌い、病気から遠ざかろうとしてきた。しかも、その知識さえも持とうとせず、ただ病気にならないことを祈ってきたにすぎない。

「私は、健康に恵まれて」と常日頃言っていた方が、いったん、病気になると、不安がいっぱいで恐れおののき、そのまま死んでしまうのではないかと絶望感に浸り、医師をあたかも古代の祈禱師や呪術師であるかのようにみなして全面的に頼ってきたのではないだろうか。

そのような病気によって、悩み苦しむことがないようにするためには、どのようにすればよいのだろうか。

その一つが、病気と疾患とは異なるということを知ることである。たとえ疾患に罹っても、そのことで日常生活にさほど支障がなければ、疾患に罹っているだけであり病気ではない。しかし、入院や手術が余儀なくされた場合には、日常生活に支障をきたすことになり、はじめて病気になる。手術に対する不安感、悪性のものかもしれないという恐怖感、退院できないのではないかという絶望感、仕事や家族についての心配など、異常な精神状態に陥ってしまうことがしばしばである。病気とは、疾患から発生した病状のために、精神的に社会的に異常な状態が起こっているといえるだろう。何ら心配しなくてもよいことでも、その知識が少ないか、欠けているため、大きな心配ごととして抱えこむ結果となっているのである。

たとえば、手術後は単なる怪我の状態であり、時間がたてば必ず癒えるように、罹った疾患をよく知り、その疾患と仲良くつきあうことも必要になる。

もう一つは、健康の裏表について知ることである。何事にも裏表の二面があるように、疾患による病的状態が裏とすれば、健康状態としての表がある。たとえ裏である病気になったとしても、表としての健康状態を取り戻せる準備状態であると考えれば、その裏の状態もさほど忌み嫌うべきものではなくなり、悩みも苦しみも軽減されるのではないだろうか。また、裏を経験することがあればこそ、その表の健康状態がより素晴らしいものと感じられ、健康であることに感謝もでき、より健康状態を保つ努力もできるのである。だからこそ、疾患に罹った場合にも、単に受け身になって医師にすべてを委ねるのではなく、健康状態を取り戻すことができるのは自分自身であり、あくまでも、自らが癒えようと努力することが必要となるのである。

昔からいわれてきた〝病は気から〟も、疾患ではなく病気のことをさしているのであり、いかなる疾患に罹ったとしても、決して病気になってはいけない、絶対に病人になってはいけないと教えているのではないだろうか。

皆さん方におかれても、疾患に罹ることなく、怪我もすることなく、より幸福で、できるだけ苦悩のない人生をお送りいただくことを祈っている。

（せとやまもといち／高知県・高市病院組合理事）

絵金の脇役たち

中西　進

私は「絵金の脇役たち」と題する話を、今まで三度した。最初は二〇〇〇年三月に高知女子大学が催したシンポジウム（高知県立文学館）で、二回目は同年六月の大阪女子大学における遠隔講義（府立三大学の連繋授業）で、そして三回目は同じくその年の十一月に大阪千里のよみうり文化センターでである。

しかし文字をとおして読者に訴えたことはない。そこで今回、その一端を書いてみよう。

たとえば、絵金の作「播州皿屋敷鉄山下屋敷」は、よく知られたお菊殺しの話である。浅山鉄山が主君殺しの謀議を知られてしまったためにお菊を殺す。家宝の皿を一枚盗み出し、紛失の責任をお菊にもたせて責め殺したのである。

その折の、鉄山兄弟の責め殺しの場を描いたものが、この絵金の作である。

ところが、その絵の忠太（鉄山の弟）の背中の紋所には、裸の男女が抱き合って口をあわせている絵が描かれている。

もちろんそのことは誰でも目につくし、絵金自身が画面のどこかに、多少世俗的な点景を描いていることも、よく紹介される。そこでこれらは、いわば絵金の遊び心といった程度に理解されてきた。

しかし私の印象は別である。大真面目に他人を責め立てている当の本人が、実は内面にとんでもない下劣さを秘めているばあいは、今日といえども日常茶飯である。

スーパーの万引き主婦を見つけたガードマンが弱みをネタに交情を迫る事件。万引き取り締まりの警察官が補導した少女と関係する事件。これらは日々新聞などを賑わす、ごくふつうの事件となってしまっている。

そしてこのことは古今東西を問わない。姦淫したものを責める資格がある者は、はたしているかといったのはキリストである。

だから絵金の意図も、またここにあったと見ざるをえない。鉄山や忠太は明らかに悪党なのだが、そのことを超えて、はたして世の中に、人を責めることができる人間がいるのかという鋭い問いを、絵金は発しているのである。

しかもこの指摘を、絵金はさり気ない点景として画面にしのばせる。これを私は「絵金の脇役」とかりに呼んでいる。この画でも主役は浅山兄弟やお菊だが、むしろ脇役の紋所の働きの方が、絵金の表現したかったものの中心なのである。

この、主役を演じた脇役は、人間の欲望とか死、時間など人間であることにおいて引き受けざるをえないもの、これこそが建前でもお題目でもない、人間本来の姿だと思われるものばかりである。

「播州皿屋敷鉄山下屋敷」の絵にしても、右に小さく茶坊主が描かれる。この「我関せず焉」といった、足取りも軽い立ち去り姿は、いかにも世上の薄情さを現している。

絵金といえば大仰な仕草や血のしたたるおどろおどろしさばかりが人目につき、そのことで人気を博しているようだが、絵金はそんなレベルの絵師ではない。

この画面の迫力と同等の迫力をもって、世間の偽善をあばき、人間をとりまく業とは何かを描いた。そこにこそ幕末日本がたくわえたエネルギーもあったというべきだろう。

以上はほんの一例である。

（なかにしすすむ／帝塚山学院学院長）

「播州皿屋敷　鉄山下屋敷」（下：部分）
所蔵者　赤岡町横町二区

IT社会の新しいコミュニティについて①

川村晶子

ITを利用して地域コミュニティを活性化する……、最近こういう言葉をよく耳にしませんか？　この言葉だけ聞くと「なにか面白そうだな」と思われる方も多いでしょう。でも、〝何をやるの？〟と問われると、具体的な説明をするのは、なかなか難しいものです。ITは何でもできる魔法の杖のように思われがちですが、実際は、人々がそれをどう生かすかが問題なのです。

昨年頃から、日本でもADSL（注1）やケーブルテレビといった通信インフラが国中に敷設されるようになり、安価に常時高速で接続できる通信環境が整ってきたお蔭で、インターネットは家庭へ一気に浸透しています。インターネット自体が生活の大切なインフラとして認知されるようになったわけですが、電気や水道と同じく自由に利用している人は、まだそんなに多くありません。

確かに、携帯電話の普及にも後押しされ、メールを利用する人は増えました。うちの母も自分専用のパソコンで、毎晩しゃかしゃかと、メールや画像のやりとりをして楽しんでいます。しかし、皆さんのメールの相手って、昔からの知人・友人、普段からお付き合いのある人がほとんどではないでしょうか？　新しい事を始めるためや、PTAや町内会のコミュニケーションを図るためにインターネットを利用している人は、ごく少数派。これでは、「地域コミュニティを活性化する仕組み」とは呼べません。

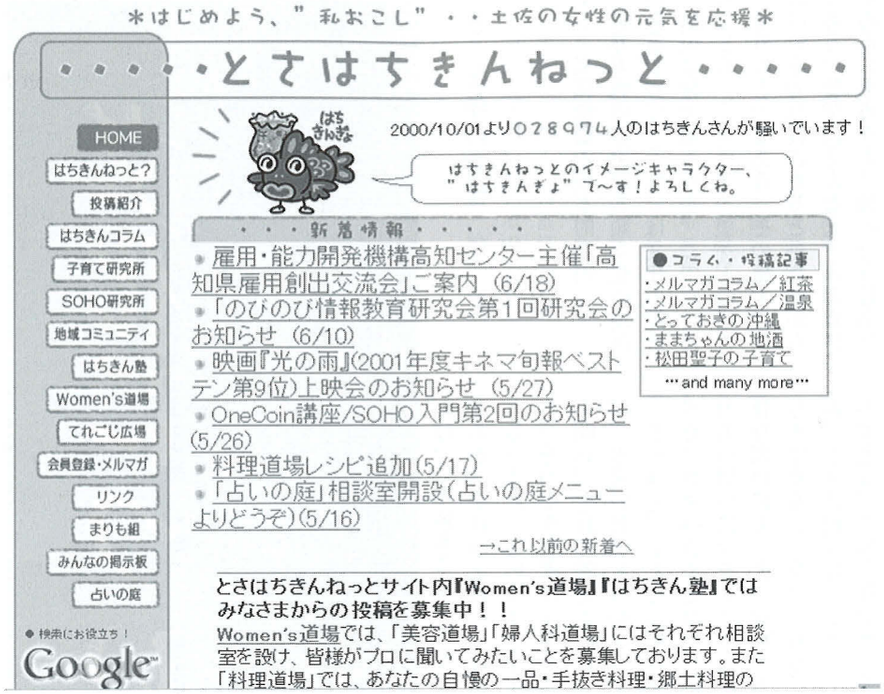
そこで、インターネットをもっと自由に利用していただくために、『とさはちきんねっと』の活動をご紹介しながら、ITを利用したコミュニティ形成について、三回シリーズでお話ししてみたいと思います。

今回は、まずコミュニティについて考えてみましょう。

昔の日本には、村社会というコミュニティが存在していました。半径数キロ内の生活行動圏。個人のプライバシーや知恵は、村全体で共有していました。しかし、科学の進歩にともない、人々の行動範囲や交流メンバーが広がっていく一方で、家族という枠、地縁といった関係が希薄化し、人々は〝個〟に、点在し始めたのです。今言われている個の時代とは、自由を獲得した反面、各自が考えて行動し、責任を取らなくてはならない時代です。しかし、一人の力で実現できることには限りがあります。私たちは、自立し連携し合うことで、地域社会の問題を解決し、生きていく力（経済基盤）をつけなくてはならないのです。そして、個々の人間がそれぞれの目的を持ったコミュニティを形成し、そのコミュニティ同士がいろんな接点を持って重なり合い機能していくことが、シナジー効果を生み、社会全体の活性化に繋がります。

高知県という枠の中でも、コミュニティのあり方は多種多様です。高知市のように、県人口の四〇％が急激に集中した地域では、個人のニーズや、必要なサービスは非常に多様化しています。一方、地縁的結びつきが強い中山間地域では、過疎の問題が深刻で、外部の人たちとどのように繋がり、その活力をどう取り入れるかが問題となります。しかし、そういった課題はコミュニティが機能し、時間や空間、年代や性別を超えて、様々な人々が解決法を探り合い、知識を共有できることで解決できるのです。そして、その思考の過程と行動とを、『知』という財産としてデータベース化（注2）することが、次の世代に文化を伝える基となり、それを生活や産業活性化に括りつけていくという一連の活動が、地域社会の生活レベルを向上させていくことに繋がっていくのです。

それでは、そこにITはどう関わるのでしょう。インターネットの普及は、点在した人々をつなぎ止め、新たなコミュニティを形成することを可能にしました。『いつ、誰が、どこからでも自由にアクセスできるコミュニティ』、それはインターネットを利用した仮想空間の中になら、簡単に実現できます。三年ほど前から、全国の自治体でも、住民とのコミュニケーションを活発化し、地域問題の解決を図るために、地域情報化推進事業の中で、ホームページや電子メールを利用したインフラを整え始めています。しかし、実際には、デジタル・デバイド（注3）や、利用者のインフラ環境問題などの様々な要因から、積極的に利用されているのはごく一部の地域です。



『とさはちきんねっと』のトップページ。皆さん来てくださいね

そういう状況の中、ITを利用して立ち上がった地域コミュニティの一つが、私が管理者として関わっている『とさはちきんねっと』です。

『とさはちきんねっと』は、高知の女性のためのコミュニティネットとして、二〇〇〇年十月に誕生しました。コミュニティが機能していくための重要なポイントである『参加者の自立』を『私おこし』と呼んで、コンセプトに掲げています。なぜ女性に特化したのか？　それは、高知の女性は元気で好奇心も旺盛な割に、デジタル・デバイドが顕著であると感じたため。働き者の高知の女性がITを駆使するようになれば、ますます怖いものはありません。ホームページ上では、占いや美容に関してなど、女性が好むコンテンツを多く提供していますが、男性の方もちらほら遊びに来られています。

このコミュニティの中で、どういう技術を使ってどういう交流が図られているのかは、次回ご紹介したいと思います。

用語説明

注1　ADSL（Asymmetric Digital Subscriber Line）
アナログ回線を使用し、データ通信と音声とを異なる周波数帯域に分離することで、ひとつの回線を音声通話とデータ通信で共用できるもの。上り（家庭からインターネット方向）と下り（インターネットから家庭方向）の通信速度が非対称であるのが特徴。

注2　データベース
大量のデータ（情報）を、一定の規則に従って保管し、検索・抽出することが可能な入れもの。データを管理するシステム。

注3　デジタル・デバイド
IT（インターネットやパソコンなど）を使うことができる人とできない人との間に生じる、貧富・機会・待遇などの格差。

とさはちきんねっとURL：
http://www.inforyoma.or.jp/tosa8kin/index.html

（かわむらあきこ／富士通株式会社高知支店勤務・『とさはちきんねっと』総括）

文化について その一

西澤邦輔

三　哲学の責任

一
序――文化没落の根本的原因

世界大戦の原因が人類文化の没落にあるとして、それでは文化の没落の原因は何であろうか。この問いに対しても、シュヴァイツァーの回答は意外なものである。その根本的原因は哲学の怠慢にあると見なすからである。哲学にそんな大それた責任があるであろうか。彼の言う哲学とは、一体どのようなものであろうか。

二
素朴な問い――哲学する心

この世に生を受けた誰しもの心の中に漠然たる思いが潜んでいる。例えば、「人はどこから来てどこへ行くのか。それゆえに、人はいかに生きるべきか」というような思いである。そのような素朴で根本的な問いを問い、それに答えようとすることが、本来の哲学する心なのである。

それゆえ、学としての哲学が差し当たりなすべきことは、そのような万人の思いに手を貸すこと、その素朴な問いにより広い視野と方向性を与えてやることなのである。ところが、十九世紀以降、学としての哲学の本流は、このような第一義を忘れ、いたずらに体系の建設や、自己の業績回顧に没頭したのである。

三
普遍的人間性理想――哲学の使命

万人が漠然と抱く素朴な問いは、何の条件も持たない「ただの人間」としての本能的な問いであるから、実は人間として根本的な、限りなく大きく深い内容を含んでいる。地上でただの人間として生きるということは、軽々しいことではない。実は、宇宙的な問いかけを受けつつ生きているのである。そうして、この宇宙的感情が、普遍的人間性理想や人道理念を生み育てる母体なのである。

それゆえ、このような素朴な問い、もしくは感情を、迂遠あるいは無意味と見なして遠ざけてしまうと、人の命と活動の目的は一定範囲に故意に極限されるので、手近で感覚的に疑いようのないものにのみ意味と目的を求めることになる。

もちろん、人生途上の各場面における当面の目的はどのようなものであれ、それ自体としては意味もあるし立派なものでもありうる。ただ、それが価値の行き止まりになって、これ以上の価値が存在する余地がなくなるところに、由々しい問題が生ずる。普遍的な人間性理想や人道理念が当然障害を受けることになるからである。限界をもったものが最終価値となり、相対的なものが絶対視されることになる。

その一例が、十九世紀以降の多くの国民国家に見られたあの国家的民族的価値観の絶対視である。それが、結果的に二十世紀悲劇の推進力となったのであるから、一見迂遠と見えることをなおざりにしたことが現実世界に重大な影響を与えたことになる。十九世紀以降の学としての哲学は、このように、本来の哲学する心を離れていたので、当然のことながら、この事態を自覚することができなかったのである。

四
構想なき活動――哲学の怠慢

人生の意味や目的について生真面目に考えるのは、青春期の一時的症状であるとか、神経質な性格的傾向であるとか、病気や老齢による不安であるとか、要するに健康な状態ではないかのごとく考えられがちである。それに、そんなことを考えてもはっきりした結論が得られるわけではないし、何の役にも立ちはしない、それよりは、絶えず目前に置かれている活動に没頭しているのが健康的である、というふうに一般には感じ取られている。

そのような迂遠な意味詮索は無視して、事柄の直接的効果の追求に全力投球してきた成果が、十九世紀以降文明世界のあらゆる分野における巨人的業績である。それは確かに、一々驚嘆に値するものである。しかしその一見健康健全精力的と見える能力と業績は、大きい視点から、普遍的人間性理想に照らして見れば、信じがたいほど幼稚愚劣病的である。シュヴァイツァーの譬えを借りて言えば、櫂で坂道を滑り降りる子供が、坂の下に何があるかはおかまいなしに、自然に高まるスピード感に夢中で身を任しているようなもの、あるいは、参謀本部のない軍隊が、全体の戦略も見通しもなく、それぞれの部隊で勝手気儘に華々しく戦闘状態を繰り広げているようなもの、なのである。

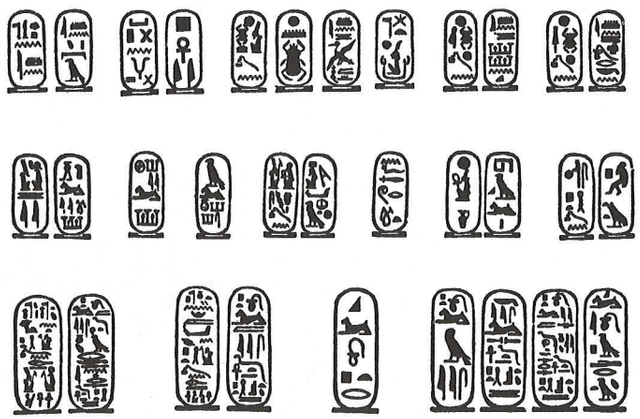
現代人は全体として実現すべき究極的目標を持たず、全体の終局を成り行きに任せてしまっている。そのため、人間の生涯や人類の歴史は、意味もなく生起消滅を繰り返す自然現象のようなものとなる。それというのも、時代の哲学が、時代精神の真の健康状態を検証することができず、普遍的人間性理想に基づく構想を人間と世界に示すことができず、いわんや事態の深刻さについて警告を発することもできなかったためである。「危険の時に際して、われらの目を覚ましつづけるべき番人かれ自身が、眠ったのである。」（石原兵永訳）。

五
結――文化再建の大道

シュヴァイツァーは単なる文明批評家ではなく、文明再建設計者である。当初からいかにして建設すべきかを問い続けている。しかもそのなすべきことを、世界を動かしているかのように見える政治家や思想家などの特別な人々の問題としてではなく、万人が今ここでなしうること、なすべきこととして考える。これこそが文化の根本的エネルギーであると考えるからである。

「人類があらゆる点で支離滅裂となっている時、もしも人生の意義についての反省に立ち返るという如き、何か迂遠な要求をするならば、いかに嘲笑をあびせられることか。しかし人間のかかる反省においてのみ、この混乱と悲惨とにどうにか対抗しうる力は生まれるのである」（石原兵永訳）。

（にしざわくにすけ／清和学園理事長）



あじさいによせて

柳井　卓

あじさいの季節である。

多彩な花色の中でも濃い空色の花は、ほの暗い雨の庭にひっそりと咲いているのが好きだ。

今、わが家の居間の壁に一枚の「あじさい」の油絵が掛かっている。この春、横矢勝画伯久々の個展の会場を飾っていた画である。画伯ご自身がすこぶるお気に入りのお作だというのを、お譲りいただいたものである。コバルトブルーに黒の薄絹を重ねたかのような光沢をもつ細身の花瓶に生けられて、ほの暗い背景にあじさいは溶けている。それでいて花は背景に埋没することなく、鮮やかに浮かびあがっている。シャクヤクやバラのような自己主張がないところが好きである。

〝雨にぬれてる手の中で　ひとり泣いてるあじさいの　うるんだ瞳のせつなさが　ここまで二人をつれてきた〟

昨年の五月にCD付私家版で出した『柳井　卓・歌曲集』に収録した「あじさい」の第一節である。この歌の由来について述べるのはこれが初めてではないので、いささか面映ゆいことではあるが、詩を書いた宮本君の思い出を交えながら記憶の糸を手繰ってみることにしたい。

それはもう四十数年も昔。新卒、新採用で赴任した宿毛高等学校の卒業式での一こまである。恒例にしたがって式は滞りなく進み、「式歌斉唱、〝蛍の光〟」が告げられた時、卒業生の席から一人の生徒が中央通路をスタスタと進み出て、くるりと振り向きざま、「皆さん！」と呼びかけたのである。

この予期せぬ出来事に、皆一瞬息を呑んだ。誰あろうその人は「あじさい」の作詞者宮本偉君ではないか。満場固唾をのむ中、宮本君は語り始めた。「皆さん、卒業していく僕たちにとって、今日は新しい人生への旅立ちの日でもあります。僕たちの旅立ちに相応しい歌を歌ってお別れしたいと思うのです。皆さんいかがですか……」。

何事が起こったのかと息を詰めた式場には、一瞬のうちに名状しがたい共感の空気が充ちた。

この唐突な、しかし侵し難い真情の吐露を汲み取ったO校長は、傍らの私に、「それでは、柳井君よろしく頼む」とのたもうた。弱冠二十五歳そこらの青年教師は大いに感動して、「宮本君、何を歌いたいの？」と尋ねると、「〝幸せの歌〟をお願いします」と応えた。式場がどよめいた。「幸せはおいらの願い　仕事はとっても苦しいが　流れる汗に未来をこめて……」。

この年の卒業式がどんなに感動的なフィナーレをもつことができたか、四十年近い教員生活で体験した数ある卒業式の中でも、このときの宮本君のハップニングは、時を経てなお色あせることなく新鮮に蘇ってくるのである。

さて、歌曲「あじさい」の由来とその顛末である。

宮本君が二年生だったと記憶する。（彼はバレーボール部主将であり、生徒会長でもあった）。ある日彼がやってきて、作曲して欲しいと自作の詩を一編差し出した。それは四節あって、それぞれの歌い出しが、「雨」、「風」、「雲」、「波」、結びが「ここまで二人をつれてきた」であった。十代の少年らしい純情詩である。メロディは三拍子で、でき上がるまでにものの二十分とはかからなかった。

ところで、一般に歌曲の旋律というものは、言葉のアクセントやニュアンスにできるだけ自然な形で沿うことが望ましい。その点で「あじさい」には作曲上修正すべき個所がいくつかあったのだが……。しかるに歌というものは不思議な生き物である。そのような作曲者のためらいをよそに、「あじさい」は一人歩きを始めるのである。

〝歌は世につれ、世は歌につれ〟という言葉もある。「昭和」という時代が遠くなりつつある今、私の教員駆けだし時代―すなわち昭和の三十年代の世相なり時代背景をちょっと思い出してみよう。

「勤評問題」、「日米安保問題」、「沖縄祖国復帰問題」、「ベトナム問題」等々、それこそ国中の言論が、賛否織り混ぜて沸騰した時代であった。日常生活の話題では、長嶋茂雄の新人王（昭和33）、皇太子ご成婚、ペギー葉山の「南国土佐を後にして」（34）、坂本九の「上を向いて歩こう」（36）、舟木一夫の「高校三年生」（38）、東京オリンピック（39）等々がある。

このように並べてみると、あの頃のわが国は、まだまだ質素ではあったけれど、今とは比べものにならぬほど、庶民も政治・経済・言論界も元気だったように思われる。しかしまた一方では、あの幻の大繁栄に向かって狂気の助走を開始した時代であったとも言えるだろう。

さて、もとへ戻って……。当時は高等学校生徒会連合という組織があって、県下の高校生たちが活発に交流していた。「あじさい」はまずそこで歌われ、やがて県下各地に広がっていった。他方、その頃全国各地に歌声喫茶が無数に出現し、高知にも「仲間」や「ヴァストーク」といった店を生んでとても賑わった。カラオケなどまだない時代のことで、客はそれぞれ好きな歌をリクエストしては、生伴奏のもとで楽しく歌っていたものである。「あじさい」は毎晩のようにリクエストされていたようである。

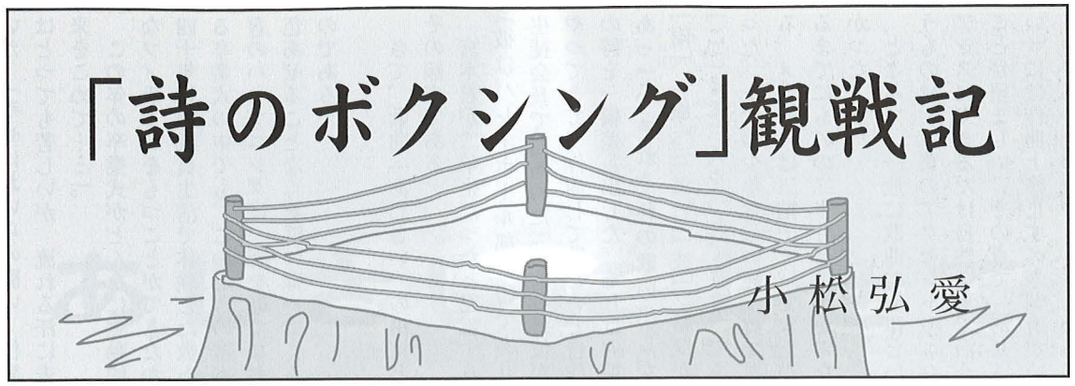
片や、宮本君は卒業後東京に出て、新聞配達しながら大学に通った。繊細にして豪快、しかも鋭い洞察力を備えた土佐の快男児は、やがて歌声喫茶の代名詞と称される新宿の「ともしび」を拠点として、さまざまな文化活動を展開していく。郷土に関わる仕事の中には、月灘の伝説によるオペレッタ「お月さんももいろ」の制作・上演や、発足して四年目になる西土佐村の『四万十楽舎』設立への関与などがある。にこにこと人懐っこい童顔そのままに、今も各地をとび歩いているに違いない。

さてさて、「あじさい」はその後、高知県合唱連盟が主催する「合唱祭」や、「おかあさんコーラス大会」の全員合唱曲としても何度か取り上げていただいた。そして「あじさい」を歌った少年少女たちもいつのまにか還暦を迎える年頃にもなった。四十年の歳月に感懐は尽きない。

気の早い桜前線の上陸につられてか、今年はあじさいも急ぎ開花してしまったようである。梅雨時にこそ映えるその装い。山草好きのわが家の庭では、横矢画伯の画と競うかのように、色も多彩にヤマアジサイが季節を彩ってくれている。

（やないたかし／高知県合唱連盟顧問）

「詩のボクシング」観戦記



小松弘愛

四月二十八日、高知市文化プラザ「かるぽーと」で、第一回「詩のボクシング」高知大会（高知市文化振興事業団主催）が開かれた。

この大会の模様は翌日の高知新聞に、「言葉のパンチで熱闘　観客爆笑、どよめきも　県代表は福島さん（伊野中3年）」といった見出しで大きく紹介されたので、私は重複を避けて、審査員の側に身を寄せての感想を綴ってみたい。

会場で渡されたトーナメント表には三月三十一日の予選を勝ち抜いた十六名の「エントリー一覧」が載っており、「まゆ」「星空のチョウチンアンコウ」「Ｊｕｎ」……等のリングネームもおもしろかったが、審査員の名前も並んでいて、その多彩な顔触れが私の目を引いた。書き写させてもらう。

①楠かつのり氏（日本朗読ボクシング協会代表／音声詩人／映像作家／関東学院大学助教授）
②松尾徹人氏（高知市長）
③松田光代氏（点字図書館音訳ボランティア／「詩のボクシング高知大会」実行委員）
④平岡望氏（ギャラリー星ヶ岡アートヴィレッヂ代表）
⑤国光ゆかり氏（南の風社編集長／高知大学非常勤講師）

そして、当日、会場での自薦による「会場審査員」として山本博永、島崎京都（みやこ）の若い両氏が加わるが、楠氏を除いて肩書に詩人という文字はない。一般に、詩や詩集の選考会には年季を積んだ詩人が当たるのが普通だから、右のようなメンバーによる審査はユニークである。詩を開かれたものにしてゆく、という発想によるものだろう。私は歓迎したい。

さて、ボクシングは一回戦、二回戦……と進んでゆく。肝腎の詩の出来映えはどうか――。心ひかれる詩があり、あっ、こんな詩は私どもの同人誌に寄稿してもらってもいいなと思ったり、私は今、「高新文芸」（高知新聞）の投稿詩の選をしているので、これは入選作として採りたいなどと考えたり、リングから逸脱した陰の審査員のようなことをして楽しんでいた。

そこで、本物の審査員の皆さんのことになるが、これはなかなか大変な仕事である。敗者復活戦を含めて十六試合、当然のことながら、対決した二人の選手のどちらかに軍配を上げなければならない。それも、朗読終了後すぐにの決断が要求される。

上：楠かつのり氏による開会の挨拶
下：朗読終了後すぐに判定が下される

両者の力に差がある時はよいが、互角の場合はしんどい。私はその昔の「歌合（うたあわせ）」の判者の苦しみを思い出すことになった。

詩のボクシングはアメリカが発祥の地と聞いているので、こういう場に「歌合」を引き合いに出すのはどうかとも思ったが、共通点もあり、比較の対象にはなり得る。ちなみに、漢詩を合わせる「詩合（しあわせ）」もあって、これは「闘詩」とも言ったので、ボクシングを「拳闘」と表記すれば字まで重なってくる。

それはそれとして、九六〇年、村上天皇の御前で行われた「天徳内裏歌合」では二つの恋歌が番いになった。いずれも、のちに『小倉百人一首』に採られる有名な歌である。

まず、「左」　壬生忠見（みぶ）

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

次に、「右」　平兼盛

忍ぶれど色にいでにけり我が恋は
ものや思ふと人の問ふまで

両歌ともに「忍ぶ恋」を歌って秀歌である。判者の藤原実頼はその場の空気から「持（じ）」（引き分け）にすることもできず、判定に大いに困ったが、天皇が「忍ぶれど……」と口ずさんでいるのを耳にして、兼盛を勝ちにしたと伝えられている。

きょうの審査の場合は、高知新聞にあったような「観客爆笑、どよめきも」といった会場の反応が天皇の代りを果たすことになったかもしれない。詩のボクシングの判定基準は、言葉の構成力、その人なりの声がもつ説得力、独自のパフォマンス、と言われているので、観客の反応が審査に与える影響は無視できないと思われる。むろん、それでよい。

ともあれ、試合の進行とともにリングの上はもちろん、観客の体温もしだいに上昇してくるような盛り上がりを見せ、決勝戦を迎えることになった。

対決するのはリングネーム「Ｍｒ．Ｍｉｃｈｉｔｏ」選手。同じくリングネーム「高瀬草ノ介」選手。キャラクターの違う二人にはそれぞれの魅力があり、ここまでの戦いぶりを振り返れば容易に優劣のつけ難い試合になりはしないか。これが詩や詩集の選考会であれば、両者ともに授賞にしてはという意見も出てくるが、ここはボクシングのリングである。激突してもらうしかない。

高瀬草ノ介 VS Mr. Michito

しかも、この決戦には取って置きの詩の朗読のほかに、あらかじめ用意されていた袋の中から引き当てた題のもとに、即興の詩を朗読するという怖いオマケまでついている。

で、「Ｍｒ．Ｍｉｃｈｉｔｏ」選手が引き当てた紙には「希望」の文字があり、ただちに朗読開始のゴングが鳴る。続いて、「高瀬草ノ介」選手のそれには「港」の文字があった。二人とも「即興詩人」としての能力を発揮して、この難しい課題によく応えた。が、難しいのは選手のみならず審査員も、と言わなくてはならない。

ここで、先の「天徳内裏歌合」の後日談に触れておこう。「恋すてふ……」の歌を負けと判定された壬生忠見は「心憂く覚えて、心ふさがりて」、ついに病没したという。こんな話を持ち出されると、審査員になるのもちょっと怖くなる。

その恐怖？　を乗り越えて七人の審査員の判定は苦渋の数字と言うべきか、四対三と出て、中学三年生の「Ｍｒ．Ｍｉｃｈｉｔｏ」（福島路人）選手をチャンピオンに選んだ。

私はスポーツとしてのボクシングには縁がない。しかし、その形を借りての現代の「闘詩」には、観客の一人としてまた足を運びたいと思っている。

（こまつひろよし／詩人）

いよいよ今秋、「よさこい高知国体」が県内すべての市町村を舞台に開催されます。各都道府県を代表する選手によって繰り広げられる水泳や陸上競技、サッカーなどさまざまな競技の中にあまり耳にしたことがない言葉として「スポーツ芸術」があります。

「スポーツ」と「芸術」の合成語が指すものは、「スポーツそのものが有する美」や「スポーツを題材にした芸術」、さらに「総合大会などの文化プログラム」があります。このうち国体でのスポーツ芸術は三番目の「総合大会などの文化プログラム」にあたります。また広い意味では、開閉会式、シンボルマーク、マスコット、ポスターなどもスポーツ芸術に含まれます。

スポーツ芸術の起源は非常に古く、古代ギリシャのオリンピアの祭典までさかのぼります。古代オリンピアでは、神の前で技や力を競うとともに、彫刻家は勝者の像を神に捧げ、詩人や音楽家は勝者をたたえる詩歌を競っていました。

近代オリンピックでは、スポーツと芸術が一体となって開花したこの古代オリンピアの姿を理想とし、一九一二年の第五回ストックホルム大会から、文字や絵画・音楽などが競われるようになりました。一九五二年の第十五回ヘルシンキ大会以降は、競技性のない芸術展示に変わり、現在では「文化プログラム」として実施されています。

国体におけるスポーツ芸術は、オリンピックのスポーツ芸術の考え方を取り入れ、昭和三十年の第十回神奈川国体で初めて公開競技として、絵画・彫刻・工芸・建築・写真の五部門における公募展が実施されました。現在は、公開競技として位置づけ、展示や公演などを通じて、開催都道府県の芸術・文化を広く紹介することを主眼として開催されています。

よさこい高知国体秋季大会のスポーツ芸術でも、地域の豊かな風土に育まれた芸術文化を広く全国に紹介するための事業として主催事業と協賛事業が企画されています。

十六市町村で実施される主催事業は、千年余りにわたって育まれてきた土佐和紙（伊野町）、鮮烈な色づかいで妖しい夢幻美の世界を展開した絵金の屏風絵（赤岡町）やスポーツに関するまんが（高知市）やおもちゃ（香北町）の展示、子どもを主体とした創作ミュージカルの上演（高知市）などの国体にあわせて企画されたもの……、さまざまな角度から高知をPRすることができるものばかりです。また国体の時期に県内で開催される文化行事なども協賛事業としてあわせて全国発信していきます。

スポーツ芸術は国体のために来県される方々に高知を知っていただくだけでなく、私たち高知県人にとっても、身近すぎてついつい見落としてしまっている郷土の文化を再発見するいいきっかけになるものと思われます。この秋、高知の魅力を再発見しにスポーツ芸術会場にぜひお越しください。

「スポーツ芸術」って何だ？

—国体と地域の文化—

スポーツ芸術主催事業実施市町村

お問い合わせ先
高知県国体局総務課財務業務班
担当　遠近（とおちか）
TEL：088・873・8300
FAX：088・873・9922

わがまち魚の棚

西村和子

「やりゆうかね、はや七夕さんやねえ」。「準備できゆうよ。見に来てね」。魚の棚通りの店頭でお客さまとの話が弾みます。

魚の棚商店街をご存じですか。高知市の中心地、はりまや橋（旧中種）商店街の東方から北へ六十メートル、道幅三メートル、店舗二十五店の小さな商店街。食料品店が多く、商品の質の良さには定評があります。もともとは名前の通り、魚を扱う店が多く、江戸時代から高知城下の台所として栄え、今でも頭上には日除けのテントが張られ、昔ながらの〝市場〟の雰囲気を残しています。

「木造アーケードのはりまや橋商店街から魚の棚に入ると、タイムトンネルをくぐり抜け何百年も遡ったような錯覚に陥る。そしてなぜかほっと安らぎを感じる」と言う人がいます。高いビルの立ち並ぶ周辺の街とは趣を異にした特異な空間に歴史と文化を感じるのでしょうか。

私は、母の営む海産物店を手伝いながら、町おこしの一助にと商店街の企画広報係やNHKラジオのリポーターを十年ほど続けていますが、この街がとても好きです。住む人が親切で、仲が良く、助け合い、協力し合います。米や醤油の貸し借り、子どもの面倒もよく見ます。親が早朝から懸命に働くので、子どももその背中を見ながら立派に育っています。

そんな街で毎日いろんな方と出会い、話を聞き、学ばせてもらっています。

ある年配の方は「子どもの頃、祖母に連れられてよく来ました。買い物客でごった返しよりました」と当時の繁盛ぶりを回想します。

確かに商店街を取り巻く環境は昔と比べ激変しました。昭和三十～四十年代に、量販店の進出、車社会の到来で人口は郊外へ流れ、店の者でさえ街には住まなくなり、中心街の空洞化が進みました。

そんな中で魚の棚はどうすればいいか、みんなで考えました。人々にもっと知られ、人々の心を引きつける町づくりを工夫しよう。それにはまず街を掃除し彩りを添えようと花を植え、旗を飾りました。元気な声で挨拶し明るい笑顔で接しよう。音楽も流そう。看板や立て札を作り、ミニコミ紙も発行しました。季節を取り入れた企画として、三月のひな祭り、五月の節句には段飾りをこしらえ、おひなさまやかぶとを折って飾っています。子どもの健やかな成長を願って続けています。時には「折り方を教えて」と子どもが集まってきます。登下校で黙って通っていた子どもたちも、挨拶をするようになりました。

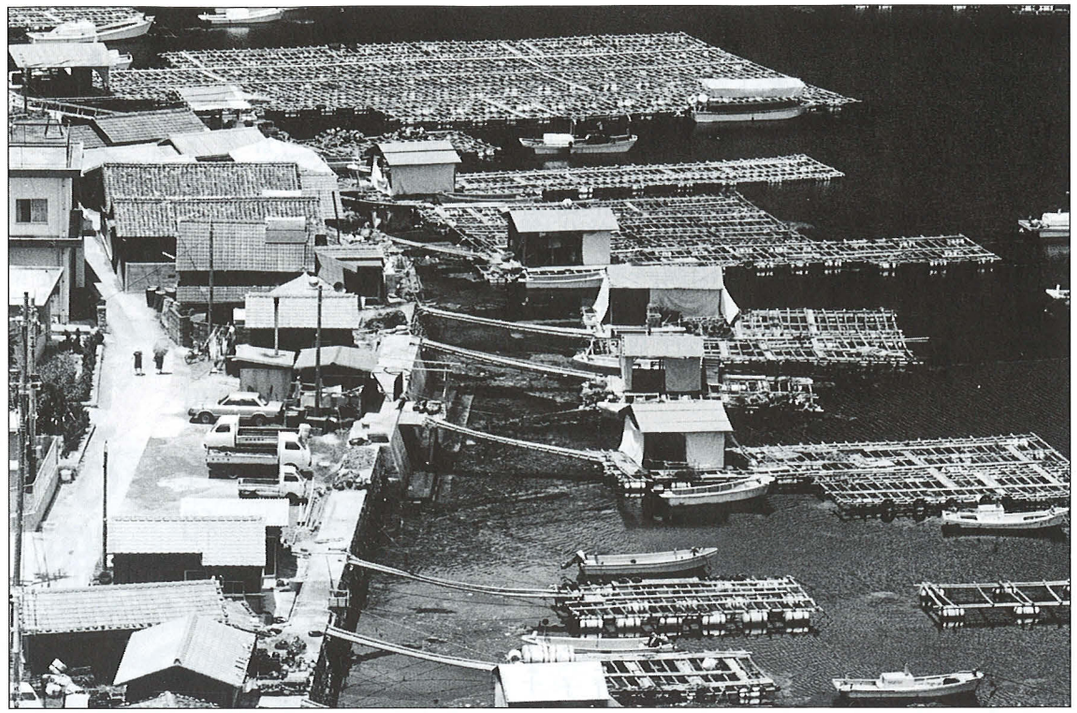
また昔歌われた「高知廻り歌」を立て札に掲示したところ「懐かしい」と写していく方がいます。

「高知の松ヶ鼻、番所を西へ行く、農人町、菜園場、新堀、魚の棚、紺屋町、種崎町を打ち過ぎて京町へ行くと、はや会所が立っている……」。高知城下の昔から栄えた地名ばかりです。どの街も元気を取り戻すように連携し、連帯感を強めたいものです。

さて、七夕飾りは今年で十八回目。大竹八本と各店用三十本ほどの竹に短冊千枚、こより四千本を町内でかまえます。でき上がると色とりどりの短冊が風にゆれ、それはきれいです。お客さまにも願い事を書いていただきます。その間交わす会話が実に楽しいですね。七夕飾りは子どもも大人も町内のみんなが参加して、わが街を愛し、街をつくる意識が広がっています。できることから一歩一歩あきらめずに進めています。

今春、魚の棚のお隣の九反田には文化施設かるぽーとができました。文化芸術を通して、人と人が出会い、語らい、交流の場として街を活気づけてくれることを願っています。

（にしむらかずこ／魚の棚広報担当・NHKリポーター）



高知を撮る　第18回写真コンテスト入賞作品

野見港（昭和46年　須崎市）　国沢隆義

パラサイト

風俗歳時記

親に寄生する独身貴族が「パラサイトシングル」と揶揄されるようになってからかなりになる。もはや話題としての鮮度は落ちてきてはいるが、その数は確実に増えているように見える。

言うまでもなく、パラサイトとは寄生虫や居候のことである。自然界を見ていると、寄生虫は限度をわきまえて寄生していることが多い。宿主にたかれるだけたかって宿主を弱らせると、そのツケが自分に戻ってくるからである。それだけでない。一見「寄生」しているようでも、よく調べるとむしろ「共生」していると考えた方がよい事例も多い。トイレの水洗化が進み、回虫やサナダ虫がいなくなって、アトピーや花粉症が増えたと言われるのは、その一例に過ぎない。昔は回虫様などが体内に居てくれたため免疫機能が健全に保たれ、アトピーや花粉症になりにくかった、と考えられている。

「寄生」、「共生」、「害虫」、「益虫」などなど、人間が勝手に名づけただけのことで、生き物様にとっては「かかわりのないこと」である。自然界では無数の生き物たちが、助け合い、食べ合いながら、「生命系」という複雑なネットワークをつくりあげている。

ところで、パラサイトシングルとて一方的に寄生しているわけではない。「子離れ不全症候群」に属する母親たちを癒すという、その「共生」的効果を見逃してはいけない。

「パラサイト」という言葉自体、もともと、単に食事のご相伴にあずかる「伴食（者）」に由来するが、後年になって「飯をたかる」という卑しめる意味が入りこんできたようである。したがって、家族と一緒に飯を食っている独身族はまことに由緒正しいパラサイトということになる。

どうも、語源的にも生物学的にも、パラサイト（寄生）と共生とは、一見、別の現象に見えるが、同じものを違った側面から見ているだけのようである。これは、「テロ」と「正義の戦い」にもあてはまりそうである。

（路）

散歩の途中で

昭和51年9月に高知市を襲った台風17号。その記憶もだんだん薄れてきている。

雑喉場橋の北詰にあるこの碑は、51年9月12日、豪雨で増水した鏡川で水防作業中に命を落とした消防団員の「殉職の碑」である。

梅雨の季節、小雨に濡れながら、碑の裏に刻まれた文字から記憶を辿ってみた。

風伯

ネクタイ

ある県庁所在地で、六、七、八月の水曜日をネクタイを締めなくてもいいカジュアルデイとし、その後アンケートをとって恒例にするかどうか決めるのだという話を耳にした。

ネクタイを締めようがどうしようが、そんなことは臨機応変にすればいいことで、なにもアンケートまでして県民の意向など聞く必要はないのではないかと思う。アンケートであろうが多数決であろうが、得られた結果は限られた特定の声でしかないという意識を、為政者は眠らせないようにすべきではないか。

とはいえ意見の多い方向に結論が流されるのは自然なことであるし、あるいは声の大きい強面の意見が通りやすいのも無理からぬことであろう。多数決、あるいはアンケートをとることで、たとえ少数意見のなかに真実があったとしても、残念ながらその民意が、反映されることは永遠にないのではないかと思ってしまう。

草の根運動という活動にしても、政治的な関わりを持つ限りにおいて、「草の根」という言葉を借りた、いわば圧力団体の一種になり得るのではないか。

多数意見だけを取り上げることを問題にしているのではない。問題とすべきは、こうした意見を聞くことで、民意を反映したという免罪符のもとに決定し、行動する権力側の姿勢なのである。などとついつい熱くなってしまうが、ネクタイをどうするかなどということは、ぜひ自分たちで決めて欲しいと思うのだが……。

（髭仙人改め竹落葉）

賛助会員募集中

年会費2000円で
どなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年６回
　お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を
　10％割引いたします。
（事業団で直接お求めの場合）

お申し込みは……
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

今号の表紙

「弧」　丹下　登

これは技術を高めることに一生懸命だった時の作品ですね。

工芸にはいろんな面があるからとりあえず良いかなって感じです。最近ちょっと力抜けてますよ。でも、力抜いたらいろんなもの見えてきたかもしれない。

物作りってけっこう楽しいものですよ。

（たんげのぼる）

文化高知 No.108 [隔月発行] 2002年(平成14年)7月1日発行

高知市文化振興事業団 出版案内

外崎光広 著
土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。
A5判・上製本・四二四頁　本体価格二、七一九円

外崎光広 編
土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十余点を事件別に分類・収録。原資料によって各々の事件の実態が把握できるようにした。
A5判・三四四頁　本体価格三、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義 編
高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書。
A5判・上製本・七三六頁　本体価格六、〇〇〇円

依光裕 編著
珍聞土佐物語（上巻）
——五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。
四六判・三九二頁　本体価格一、五五三円

依光裕 編著
珍聞土佐物語（下巻）
——五十人の語り部たち

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。
四六判・四〇八頁　本体価格一、五五三円

岡林清水 著
高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く〝旅のなかの文学史〟ともいえる文学案内。
四六判・二七八頁　本体価格一、七四八円

山本大 著
幕末の青春
——坂本龍馬の生涯

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。
四六判・一六八頁　本体価格一、一六五円

藤本稔子 著
思いっきりみとめて子育て
——子育て　個育て　親育ち

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育っていく過程を描きながら子育てを考える。
四六判・三五二頁　本体価格一、五五三円

坂本正夫 著
土佐の習俗 婚姻と子育て

民俗学の宝庫といわれる土佐の村々を歩き、土地の古老たちから伝承を採集。三十五年にわたる調査研究の中から婚姻と子育てに関する伝承・習俗を体系的にまとめた書。
四六判・二〇〇頁　本体価格一、四〇〇円

高知市文化振興事業団 編
高知のエスプリ
——ふるさとの未来（あす）を考える

県内のオピニオン・リーダー五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。
A5判・一六〇頁　本体価格一、一六五円

高知の文化を考える会 編
高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。
A5判・一八八頁　本体価格一、一六五円

清水孝之 著
中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。
A5判・上製本・三六二頁　本体価格三、八〇〇円

筒井広道 著
画帳の歳月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。
A5変型判・上製本・二五六頁　本体価格一、九四二円

山岡浩 著
高知の農業

地域農業・農産・農に生きる人々をつぶさに訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的な産地づくり事例を紹介。
A5判・二四八頁　本体価格一、八〇〇円

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編
土佐弁 土佐日記

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。
B6判・上製本・一三〇頁　本体価格九七一円

高知県緑の環境会議 森林研究会 編
高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかかわりの歴史、現地への道のり等を紹介。
B5変形・二二八頁　本体価格二、四二七円

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)／郵便振替01680-5-14869
http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin
E-mail bunshin@i-kochi. or. jp